

第64回 日本アレルギー学会学術大会

2015年5月27日(水) 12:10 ~ 13:10

グランドプリンスホテル新高輪 国際館パミール 第7会場(1階 旭光)

教育セミナー 14

**スギ花粉アレルギー治療
における特異IgG4の
臨床有用性**

【司会】

斎藤 三郎 先生 (東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター 分子免疫学研究部)

【演題1】

ES14-1 スギアレルギー特異 IgG4 測定系の概要

演者：照内 友也 (ニッポーメディカル株式会社 研究開発部)

【演題2】

ES14-2 舌下免疫療法におけるバイオマーカーとしての IgG4 の検討

演者：米倉 修二 先生 (千葉大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学)

スギ花粉アレルギー治療における特異IgG4の臨床有用性

米倉 修二先生

千葉大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学

舌下免疫療法におけるバイオマーカーとしてのIgG4の検討

照内 友也

ニッポーメディカル株式会社 研究開発部

スギアレルギー特異IgG4測定系の概要

近年、アレルギーの治療として舌下免疫療法（以下SLIT）が注目されている。SLITは皮下にアレルギーを注入する免疫療法と比較し、侵襲性が低く、激しいアレルギー反応を起こしにくいとされている。現在スギ花粉症に対する舌下免疫療法薬が販売されており、約7割の患者のアレルギー症状が改善することが報告されている。しかしながら現状では治療中にその効果を予測もしくはモニタリングすることが出来ず、症状の改善が見られない場合でも2年間の継続が必要となる。そのため、治療効果を反映もしくは予測する客観的なマーカーが望まれている。

以前に実施された臨床研究において、SLITによるアレルギー特異IgG4の増加が観察されている。アレルギー特異IgG4は、IgEの阻害抗体として作用することによって、アレルギー症状の抑制に寄与していることが報告されているが、その有用性に関しては未だ一致した見解が得られていない。そこで、スギ花粉症未発症者を対象としたSLITにおける発症予防効果を検討した臨床検体を用い、スギアレルギー特異IgG4の臨床有用性の検討を行った。

本検討では特異性の高いanti-human IgG4 mouse monoclonal抗体を使用した化学発光酵素免疫測定法による血清スギアレルギー特異IgG4の測定系（ニッポーメディカル）を用いた。

臨床検体はSLITを施した群54検体とプラセボ群49検体の2群に分類され、それぞれの群より投薬前、花粉飛散前（投薬後）ならびに花粉飛散後（投薬後）の3回に分けて血清を採取、これらを用いて血清スギアレルギー特異IgG4の測定を行い、発症予防効果との関連性を検討した。

本検討では、血清スギアレルギー特異IgG4とSLITによるスギ花粉症の発症予防効果との関連性は明確にはならなかったが、SLITを行うことにより血清スギアレルギー特異IgG4が花粉飛散後に有意に上昇することが確認された。上記の結果より、SLITにおけるアドヒアランスを良好に維持するための補助として、血清スギアレルギー特異IgG4の測定は有用であることが示唆されたが、今後症例数を増やして検討を継続する必要がある。